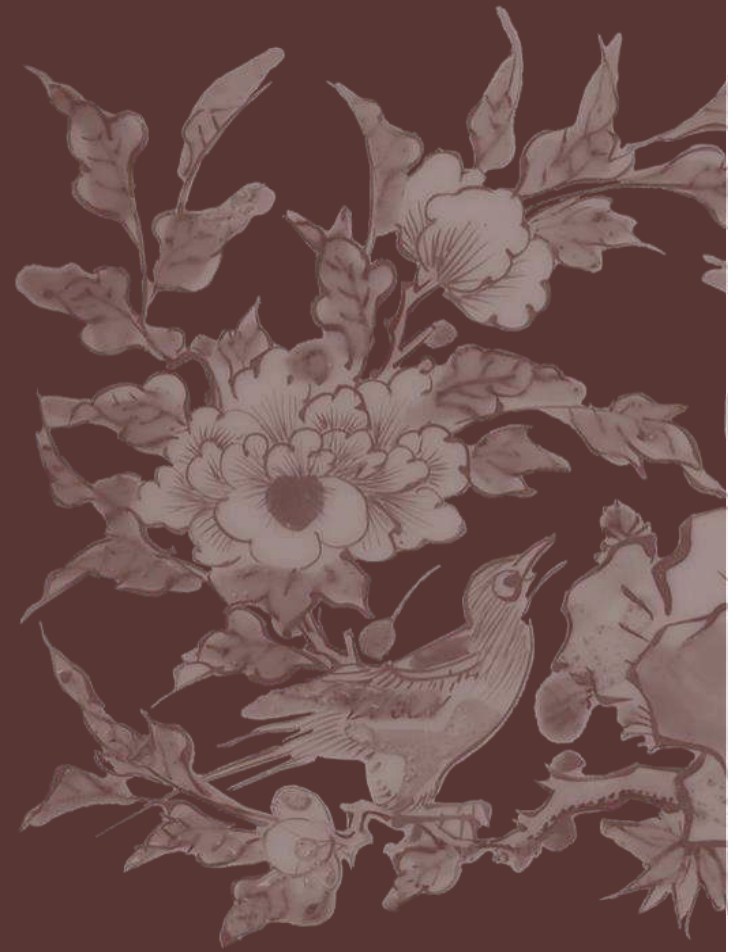


秋号 彩り
Irodori

Autumn



奥田連峯堂



奥田連峯堂

TEL : 075-561-3655

FAX : 075-525-1148

営業時間 : 11時～18時

定休日 : 毎週水曜

〒605-0073 京都市東山区祇園町北側244

<https://www.renpoudo.com>

✉ renpoudo@nth.biglobe.ne.jp

奥田連峯堂
2021

1.

南京赤絵 花鳥図角皿 5客組

中国 明時代末

径9cm 高さ2.5cm

縁にソゲ、虫喰い有

中国 明時代末期 景德鎮民窯では古染付・祥瑞・南京赤絵と呼ばれるやきものが作られ、日本に渡ってきました。

江戸時代初期の日本では、茶人が新奇な茶道具や飲食器を注文焼成させる風潮もあり、日本人好みの茶道具や飲食器を中国へ注文したと考えられています。

中国では明朝が衰退していく乱世の中で、景德鎮 民窯が官窯に取って代わった時期であり、民窯の染付磁器は、胎土や釉薬などが決して上質とは言えませんが、それまでの型にはまった様式から一歩踏み出し、簡略で自由奔放な絵付けや、独創的な造形、釉薬が剥奪している虫喰でさえからも自然の風流な味わいを見出して喜び、粗雑な雰囲気を楽しみ、その当時の日本人は愛玩しました。





2.

須恵器

長野草風箱書

口径15cm 高さ16cm

須恵器の中でも甬と呼ばれる口が大きく開いた壺です。
窯の中で自然に灰が降って流れた自然釉が美しいです。
丸底で叩き目が見られます。
口には窯の中で付着した物やソゲが見られます。
箱の蓋裏には明治から昭和にかけての画家 長野草風による
本作品が描かれています。
長野草風が愛蔵したのかもしれませんが。

須恵器は5世紀前半に朝鮮半島から伝わった新しい技術で作られた硬質土器です。
高火度焼成によって窯の中で灰が降りかかって出来た自然釉が掛かっています。



3.

古清水 菊葵紋銚子

江戸時代

径17.5cm（注口含）×12.5cm 高さ17.5cm（取っ手含）

蓋には菊、桐、葵が描かれています。

側面には、龍、鳳凰、梅、桐が描かれています。

高台には「栗榮」印が有ります。

注ぎ口にソゲが有ります。



4.

古清水 忍草図聞香炉 一対

江戸時代

径7.2cm 高さ6.3cm

金色、藍色、緑色の色彩が古清水らしく美しいです。木製の蓋が付いています。香炉には仕覆も付いています。聞香炉は、もともとは香木の香りを手元で楽しむ「聞香」のために作られた香炉です。縁の金がところどころ取れていますが、その他は良い状態です。

幕末に磁器焼成が本格的に始まり、これが「清水焼」と呼称されるようになると、江戸時代中期以前に京で焼かれた陶器を「古清水」と呼ぶようになったと言われます。また、江戸時代後期にあっても磁器とは異なる京焼色絵陶器の総称としても用いられています。



5.

藍九谷 竹に兎図五寸皿

江戸時代 17世紀

径15cm 高さ2cm

余白を取った絵画的な構図で、右下には竹の間から兎が見えます。一段立ち上がりの付いた器体になっています。高台内には角福銘が書かれています。



6.

硯屏

錦光山

江戸 - 明治

径13cm×6cm 高さ11.8cm

足にソゲ有

表裏同じで、親子が松の傍で月を見上げている構図の硯屏です。天辺には筆立てにも使える穴が開いています。高台に「錦光山」の彫銘が有ります。

硯屏とは、硯の正面に立てて鑑賞する小形の屏風式文房具のことです。硯屏は文人のシンボルとも云うべき文房具で、文人達は各々希望のデザインを工人に指示し、作成を依頼したと思われます。

錦光山（きんこうざん）は、京都で代々続いた京焼（粟田口焼）の陶工です。京都のみならず、薩摩焼に京焼風の絵付けをした京薩摩や、陶器を胎に用いた陶胎七宝などを手掛けて、「錦光山」のブランドで欧米をはじめ世界にも輸出しました。



「錦光山」の彫銘



7.

薩摩香炉

幕末 - 明治

径6cm 高さ8.5cm

上部には七宝文様が巡らされ、胴には窓絵に菊桐文様が描かれ、その間には青海波、亀甲文様などが繊細に細かく描かれています。小ぶりの香炉です。足には獅子が描かれ、三つ足になっています。

蓋は銀製で菊文様になっています。



8.

花扁壺

河井 寛次郎

共箱

昭和

口径9cm×7.5cm 胴径26cm×20cm 高さ23cm

高台に窯キズ有

俵形をした扁壺の鉄釉の地に花文様が描かれています。片面には大きく真ん中にひとつ、もう片面には2つの花文様が流れるように描かれています。

「京都国立近代美術館 川勝コレクション」図録に類似品が掲載されています。

高台にはじけた跡の窯キズがあります。



9.

鉄葉方壺

河井 寛次郎

共箱

昭和

口径11.5cm×11.5cm 高さ23cm

端正な形の四面に鉄釉が掛かり、茶色と黒色が混じり合い荒々しさやエネルギーを感じます。

「京都国立近代美術館 川勝コレクション」図録に同じ型を使ったと思われる同形品が掲載されています。



10.

花紋碗

河井 寛次郎

河井紅葩極箱

昭和

口径8.5cm 胴径10.5cm 高さ11cm

ほんのり赤みを帯びた地に、呉須、辰砂、鉄釉で花紋様が描かれています。

寛次郎の娘 河井紅葩が箱書きしています。



1 1.

染付麦藁手先猪口 12客組

12 代 永楽 善五郎 (永楽 和全)

共箱
明治
径8cm 高さ10cm

麦藁手と呼ばれる縦縞の文様が描かれた器です。麦藁手は、その模様が麦の穂のように見えることから、そう呼ばれています。市松文様、網目文様などと並び、人気の高い文様です。

永楽善五郎は、京焼の窯元の一つです。千家十職の一つ土風炉・焼物師であり、代々土風炉、茶碗などを製作しています。



1 2.

呉須赤絵四方蓋向付 10客組

15 代 永楽 善五郎 (永楽 正全)

共箱

昭和

径9.5cm×9.5cm 高さ7cm (蓋含)

形は角が隅切になった四方で、赤、緑、青、金を用いて、草花が描かれています。見込みや蓋の裏は白地です。

15代永楽正全は、14代妙全の甥で、15代襲名前は14代妙全を支えました。15代永楽善五郎としては5年間のみで歴代の中でも短いですが、現在の永楽家の基礎を築きました。





13.

染付網絵だし注 10客組

16 代 永楽 善五郎 (永楽 即全)

共箱

昭和

径6cm 高さ6cm

内外に丁寧に網目が描かれています。



14.

祥瑞写升盃 10客組

16 代 永楽 善五郎（永楽 即全）

共箱

昭和

径5.5cm×5.5cm 高さ4.5cm

側面には松竹梅と山水図が描かれています。梅と山水図は白地に陰刻されています。縁は鉄釉が巡らされ、内縁には笹と松が描かれています。



15.

絵替蒔絵椀 10客組

明治

径12cm 高さ9cm

西山完瑛下絵

蓋の表と裏の蒔絵が絵替わりになっています。菊、稲穂、水仙、桜、牡丹、バッタ、椿、トンボ、雀、ツバメなどが蒔絵されています。

江戸時代から明治期にかけて活動した大阪の絵師 西山完瑛が下絵をしています。

箱の底には大阪 心斎橋でこのような美術品を扱った「田中屋製」の押印が有ります。





16.

南鐔鍍目洋盃 6客組

竹影堂

共箱

昭和

径5.5cm 高さ7.8cm

南鐔（銀）で作られ、全体的に金槌で叩いて入れた細かい鍍目模様が入っています。

竹影堂は江戸時代から続く鋳師として金工の作品を生み出し続けています。



17.

練上酒呑

松井 康成

共箱
昭和-平成
人間国宝
径6.5cm 高さ5.5cm

生成り色の地にブルーやピンク色のマーブル模様が描かれています。
高台脇に「康」印が有ります。

松井康成は、練上の技法で人間国宝となりました。笠間市にある月崇寺の住職として職務をしながら、陶芸家としても活動していた少し変わった経歴の持ち主です。練上げは、色の異なる土を組み合わせる模様を作る技法です。



18.

御本内刷毛目茶碗 茂三

朝鮮時代 17世紀

径12.5cm 高さ7.5cm

全体的に薄作りで、内側には白い刷毛目がまわされています。
淡い紅色の斑点が見られ、豊かな景色となっています。高台は渦彫りが有ります。

箱蓋表には「茂三 茶碗」と書かれています。

御本茶碗は、高麗茶碗の一種で、日本からの注文で焼かれたものを言います。御本の名前は、御手本の意で日本で作られた手本を元に朝鮮で焼かれたことが由来です。

淡い紅色の斑点が表れることが多く、この斑点を御本と呼ぶことがあります。

対馬藩を取り次ぎにして、朝鮮半島の釜山 倭館窯で焼かせました。

中庭茂三をはじめ、茶碗焼役人として釜山 倭館窯に出向し、朝鮮の陶工を指導して注文品を焼かせ、それぞれ独特な雅味のある逸品を後世に残しました。対馬藩を通じて徳川家や他の大名に送られました。





19.

時代 漆絵茶器

江戸時代

径18.5cm 高さ7cm

蓋の甲部分には楽器を弾き、踊り、それを寝そべって眺めている人物が描かれています。

側面には駕籠に人や物を乗せて運んでいる様子が描かれています。



20.

大原女蒔絵硯箱

昭和

径15.8cm×17.7cm 高さ3cm

蓋の表に大原女、裏には秋草が蒔絵されています。水滴は蝶の形に象られています。

大原女とは、比叡山延暦寺の麓に位置し、三千院や勝林院など、天台宗の寺院が点在する大原でとれた柴や薪、農作物などを頭にのせて京の町まで売りに歩いた行商の女性のことです。鎌倉時代から昭和初期まで、約800年にわたって続いてきた大原の風習です。その京都の風俗を記した江戸時代後期の書物「都名所図会」に描かれたり、壬生狂言の演目になったりするほど広く親しまれてきました。

背中ではなく、頭に荷物をのせて運んだのは、柴など長さがあるものを進行方向と平行にのせることで、細く険しい山道を少しでも歩きやすくしたためと考えられています。



21.

魚形錠

真鍮製

19世紀

径18cm×10cm 高さ3cm

李朝家具に用いられる錠です。表面に細かな文様が彫られています。鯉は出世魚と呼ばれ、鯉の滝登りは吉祥文様と言われています。実際に使用できます。観賞用に飾ってお楽しみも頂けます。



22.

ラスター彩胡姫花文香炉

加藤 卓男

共箱

人間国宝

昭和 - 平成

径13.5cm 高さ13.5cm

ラスター彩は9世紀にメソポタミアで始まり、14世紀以降に衰退してしまい、幻のペルシア陶器と言われている技術です。金属的な光沢が特徴です。そのようなラスター彩に加藤卓男は魅入られ、復元を志し、残りの人生を賭け、試行錯誤の結果、復元に成功しました。胡姫（西方のペルシア系異民族の踊り子の女性）三面に描かれています。高台には「卓」銘が有ります。

「陶彩の華 加藤卓男の世界」図録に類似品が掲載されています。



23.

兼六園姫小松造平棗

川北 良造

共箱

人間国宝

平成

径8cm 高さ5.5cm

初代前田利家公が金沢城入城の際に植えられた名松 姫小松材が使われています。「平成七年 四百年天寿を全う 四ヶ之内」と箱の蓋裏に書かれています。

類似品が図録「阪神百貨店創立40周年記念 第五回川北良造挽物木工芸展」に掲載されています。

また、同様の姫小松が使用された平棗が石川県立美術館に所蔵されています。

棗の蓋裏に良造の花押が有ります。高台に「良造」の彫銘が有ります。

川北良造は石川出身の木工芸家で、平成6年に「木工芸」で重要無形文化財の保持者（人間国宝）になりました。



24.

脂松香合

川北 良造

共箱

人間国宝

平成

径6.5cm 高さ2cm

脂松（やにまつ）とは、樹齢300年程度の赤松や黒松の、脂を含んだ赤味の部分を言います。樹脂分が多く、磨くと透明感のある光沢を放ちます。銘木中の銘木として扱われてきましたが、近年には貴重品になっています。

高台に「良造」の彫銘があります。

箱の蓋裏に重要無形文化財の押印があります。

川北良造は石川出身の木工芸家で、平成6年に「木工芸」で重要無形文化財の保持者（人間国宝）になりました。



25.

青磁牡丹文一輪生

楠部 彌弑

共箱

昭和

口径3.4cm 胴径11cm 高さ20cm

中国で南宋から元時代に作られたものを楠部彌弑が写したものです。青磁の鮮やかな青緑色の釉調とあいまって発色も素晴らしい花入です。胴には牡丹唐草文が浮牡丹で巡らされています。

楠部 彌弑は、京都市生まれの陶芸家で大正から昭和にかけて活躍しました。作風は多技多彩で知られます。技法は違って作品の出来にばらつきがなく、どれも優れた完成度の高い作品です。また、後進の指導にも尽力し、多くの弟子を育てました。



26.

仁清写翁置物

16代 永楽 善五郎（永楽 即全）

共箱
昭和 - 平成
径22.5cm 高さ30cm

花菱亀甲文様の装束を着て、松鶴が描かれた扇を持ち、穏やかな表情をしています。
同様にやきもので作られた翁面を装着すると微笑んでいる様子になります。





27.

金欄手蘆雁図煎茶碗 5客組

初代 三浦 竹泉

共箱

明治 - 大正

径6.5cm 高さ4.5cm

赤磁に金欄手で鳥が描かれています。高台内には染付で「古器観木米造」、竹泉の印が押してあります。京焼の幕末三名人 青木木米の作品を竹泉が写しました。

三浦竹泉は初代が明治期に五条坂に窯を構えた京焼の窯元です。代々三浦竹泉と名乗っています。



28.

赤絵龍鳳凰水注

三浦 竹軒

共箱

昭和

胴径13cm 直径16.5cm 高さ16cm

胴に龍と鳳凰、丁子、唐草が、蓋に宝尽文様である金囊、打ち出の小槌が描かれています。隙間なく描かれています。蓋裏に「三宜菴 竹軒造」と染付で銘があります。



29.

立雛図幅

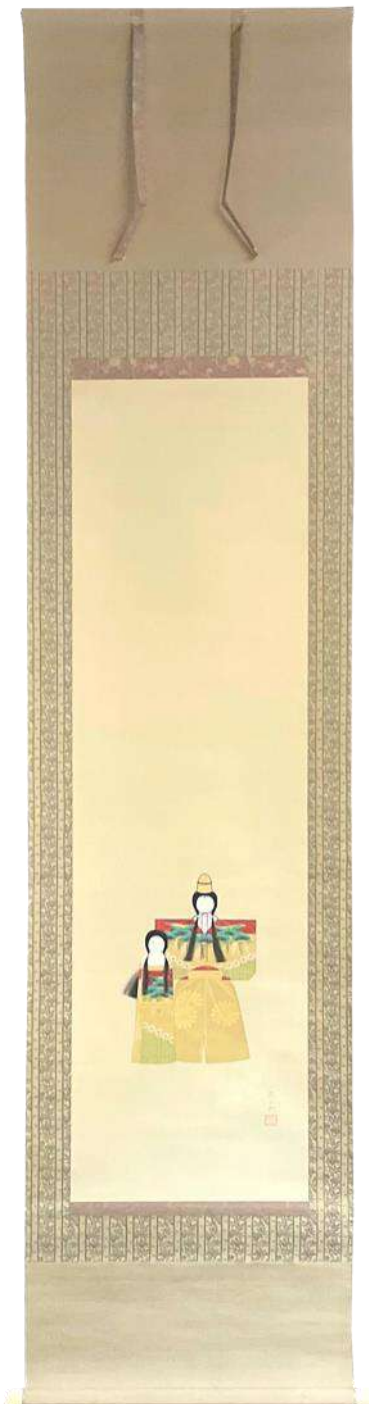
中村 大三郎

絹本
共箱
大正 - 昭和
幅46.5cm 長さ210cm

立雛は紙雛という別名を持ちます。紙で作った人形を川に流して厄払いをしたことが立雛の起源となっています。

袴や着物には松と菊文様が描かれています。表装の中回しには桐の文様の裂地が使われています。

中村大三郎は、京都で生まれ、西山翠嶂に師事しました。歴史・風俗を取材にした美人画から本格的な現代美人画へと画風を展開し、晩年は能楽を取材した作品を数多く描きました。京都市立絵画専門学校の教授となり、後進の指導にもあたりました。



30.

一行「拾得手中箒」

近藤 悠三

紙本
共箱
人間国宝
幅26cm 長さ190cm

拾得は、中国・唐時代の伝説的な僧で、普賢の化身とされ、豊干禅師に師事したと伝えられます。

寒山と共に寒山拾得として、詩は「寒山詩」に収載され、禅僧に好まれ、画題として数多く採り上げられてきました。

「拾得手中箒」は寒山詩の一節で、拾得は箒を持った姿で描かれていることが多いです。

近藤悠三は、華道家の西川一草亭の弟で日本画家であった津田青楓より漢詩の手ほどきを受けました。



31.

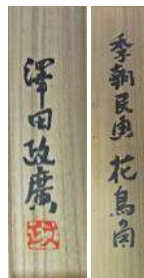
李朝民画 花鳥図幅

紙本
澤田政廣箱書
19世紀
幅33cm 長さ180cm

赤、青、黒色で鳥と蓮が描かれています。

李朝民画は、朝鮮 李朝時代後期に庶民の実用的な民俗絵画として描かれました。結婚や還暦などの儀礼、装飾、魔よけ、開運などの実用的な目的のために、屏風や掛軸にしたり、壁に貼ったりして用いられたようです。日常生活における空間を彩り、人々の心を支えるための必要欠くべからざる存在でした。

箱書きは澤田政廣です。澤田政廣（さわだ せいこう 1894年 - 1988年）は、熱海生まれの彫刻家です。彫刻をはじめ創作しましたが、美術品のコレクションにも熱心でありました。



32.

注連図幅

横山 清暉

紙本

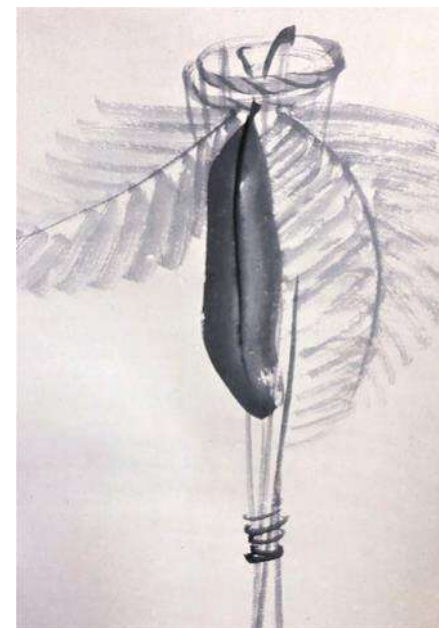
合箱

江戸時代

幅29.5cm 長さ196cm

注連飾りに雀が描かれています。

注連飾りの稲穂に雀が寄っているのを見て、良い「物施」ができた、千客万来、商売繁盛を喜ぶ習慣があると言われています。



33.

額 竹林舞妓図

三輪 良平

共シール

昭和 - 平成

額：縦70.5cm 横58.5cm

三輪良平の描く題材では女性が多く、その中でも特に舞妓は代表的な題材です。京都 祇園で毎年行われている舞妓達の式典「都をどり」のポスターを描いていました。



34.

額 いろは文着物図

芹澤 銑介

紙本肉筆

人間国宝

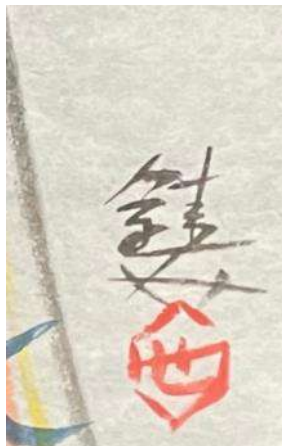
昭和

額：縦48cm×横57cm

いろは文は芹澤銑介を代表する文字文様です。いろはに以外に、「東西南北」、「花鳥」、「山水」の文字文様も見られる色彩豊かな作品です。

右下に「銑介 せ」の銘が書かれています。

芹澤銑介は、柳宗悦の「工藝の道」を読み、深い感銘を受け、沖縄の紅型の美しさに強い衝撃を受けて、染色家になることを決意しました。そして、染色家として「型絵染」で人間国宝に認定されました。また、染色にとどまらず、本の装丁、ガラス絵、板絵、陶器の絵付け、看板や照明などのデザインなど、幅広い分野で活躍しました。



35.

額 扇面文着物図

芹澤 銈介

紙本肉筆

人間国宝

昭和

額：縦48cm×横57cm

色とりどりの扇が描かれています。着物に用いられる文様で、扇文・末広文とも呼ばれ、末が広がる(末広がり)ことから縁起のよい吉祥文様です。扇の中に絵がそれぞれ違い、楽しいです。

右下に「せ」の銘が書かれています。



作家略歴（五十音順）

12代 永楽 善五郎（永楽 和全）

1823（文政6）年 - 1896（明治29）年
保全の長男。幼名は仙太郎。義弟 宗三郎（回全）と共に仁清窯跡に御室窯を築窯し、本格的な作陶活動に入る。44歳で隠居した後も加賀大聖寺藩に招かれて山代で九谷焼製陶の指導。1882年に油橋詰町を離れて京都東山に菊谷窯を開窯。この頃、妻を亡くした上に耳を聾した事から「耳聾軒」と号す。保全の残した負債に苦しむなどもしたが、よく後代に基盤を残した。

15代 永楽 善五郎（永楽 正全）

1880（明治13）年 - 1932（昭和7）年
14代妙全の甥。妙全の没後、昭和7年までの約5年間、15代として活躍。妙全生存中はその代作に当たり、大正初年には信楽へ赴いた。建仁寺4世竹田黙雷老師より「正全」の号を受けた。

16代 永楽 善五郎（永楽 即全）

1917（大正6）年 - 1998（平成10）年
14代得全の甥15代正全の子。妙全の養嗣子。三井家・三千家に入りし数々の名品を作る。茶道隆盛と共に現代の名工の一人に数えられる。

河井 寛次郎

1890（明治23）年 - 1966（昭和41）年
島根県生まれ。東京高等工業学校窯業科卒後、京都市陶磁器試験場に入所。京都市五条坂に窯を築き作陶を行う。東洋古陶磁の技法による作品を制作していたが、民藝運動に関わり、実用を意識した作品に取り組むようになる。文化勲章、人間国宝、芸術院会員への推薦を辞退。

加藤 卓男

1917（大正6）年 - 2005（平成17）年
岐阜県多治見市生まれ。父 5代加藤幸兵衛に師事。古代ペルシア陶器の斬新な色彩や独創的な造形、釉調に魅力を感じ、西アジアでの長年の発掘研究を経て、滅び去った幻の名陶ラスター彩の復元をはじめ、青釉、三彩、ペルシア色絵など、高い芸術性を持つ異民族の文化と日本文化との融合に成功。平成7年に人間国宝に認定。

川北 良造

1934（昭和9）年 -
石川県出身。木工芸家の父 川北浩一に師事。のちに氷見晃堂に師事。挽物の技術に秀で、伝統的で高度な技術を持つ。拭漆の技法を高め、深みのある作品を作る。正倉院宝物の復元にも力をそそぐ。

近藤 悠三

1902（明治35）年 - 1985（昭和60）年
京都生まれ。富本憲吉の助手をつとめ、昭和3年、帝展入選。40年、京都市立美大(現京都市立芸大)学長。52年、染付で人間国宝に認定された。

楠部 彌次

1897（明治30）年 - 1984（昭和59）年
染付、青磁、鈎窯、仁清風など、作風は多技多彩。彩埴と名付けた釉下彩磁は独自のものである。また京焼の伝統を踏まえた色絵は優美と言われる。帝展や日展などで活躍。昭和53年、文化勲章受章。

芹澤 銑介

1895（明治28）年 - 1984（昭和59）年
静岡市生まれ。東京高等学校図案科卒業後、生涯の師である柳宗悦と沖縄の染物紅型に出会ったことにより型染めを中心とした道に進む。1956年、間国宝に認定。

中村 大三郎

1898（明治31）年 - 1947（昭和22）年
京都生まれ。京都市立絵画専門学校卒業。在学中、第12回文展に初入選。第2回、第4回の帝展で特選となる。西山翠嶂に師事して青甲社に入る。その後、自身の画塾を創立。帝展審査員や京都市立絵画専門学校教授を務め、後進の指導にもあたった。歴史・風俗を取材にした美人画から本格的な現代美人画へと画風を展開。晩年は能楽を取材した作品を数多く描いた。

松井 康成

1927（昭和2）年 - 2003（平成15）年
長野県生まれ。明治大学を卒業し、茨城県笠間市にある浄土宗月崇寺の住職の跡を継ぐ。その後、廃窯となっていた、山門下の窯を再興し、東洋陶磁の研究を行う。栃木県の田村耕一に師事。練上手の技法を研究し、完成させ、昭和44年には、第9回伝統工芸総裁賞や日本陶磁協会賞などの数々の賞を受賞。平成5年、人間国宝に認定。

三浦 竹軒

1900（明治33）年 - 1990（平成2）年
京都生。初代竹泉の三男。三代三浦竹泉。長兄二代竹泉が早世したため大正10年三代を襲名、昭和6年二代竹泉の長男に四代竹泉を継がせ、分家独立して竹軒と名乗る。金欄手を得意とし、仁清、乾山風の華麗な茶道具、花器が

中心。政府認定技術保存資格者。京都伝統陶芸家協会員。

初代 三浦 竹泉

1854（嘉永7）年 - 1915（大正4）年
畳屋・渡辺伊兵衛の次男として京都に生まれ。号 有声居・節月庵。3代高橋道八に師事し、五条坂で独立。早くから出藍の誉れ高く、西洋彩色を日本磁器に応用した釉薬透明紋を開発。内外の展覧会やシカゴ、パリの万国博覧会等で称賛を博した。明や清時代の陶磁器に手本を求めた作品にも優れたものが確認されている。煎茶を好んで当時の文人墨客との交友を重ねる。画を田能村直入に学び、漢学にも造詣深かった。

三輪 良平

1929（昭和4）年 - 2011（平成23）年
京都生。山口華楊に師事。華楊の画塾晨鳥社に学ぶ。日展入選を重ね、昭和36年第四回新日展で特選・白寿賞受賞、また翌年第五回展で菊華賞受賞。裸婦や大原女・舞妓を題材に清麗な女性美を描く。京都祇園で開かれる「都をどり」のポスターも手掛ける。

横山 清暉

1792（寛政4）年 - 1864（元治元）年
京都生まれ。初名は暉三、字は成文・奇文、通称は主馬・祥介、号は五岳・霞城。松村景文に四条派を学ぶ。また一説では江村春浦にも学んだともいわれている。岸連山・塩川文麟・中島来章と共に平安四名家と称され、新町四条北に住む。門下に村瀬双石・岡島清曠がいる。安政の禁裏御所造営には彩管をふるった。